大雲堂選
支那歷代國體變遷

16

へ8
3869
80

大家選 笠附後

3869
80

大正七年三月寄贈
室井平藏氏

はつう孫作

詩附場所のくさぐさ

ほ一水ふ　ほ一水ふ　ほ一水ふ

もんぜん向上の一路うち通じ

ぜやさんぜいひとしるものの安居

をちらばきぶ紙衣をわるる

かぜ　ほ　ほ　芳井いうえん

ほ霞鍵をはるる世うとぐ

松虫の優なるやくにたちの

さわぐ　きぐいおのが三つ片方

うやう　巧の見えとうすもの

80
特
3869
80
創
3842
14

句作の便宜所にて
ものなれば
暑てし咏嘗の
ありぬべし
歌のかゝるべ

文仕九申年
中神月

井養誌

冠附宝月続

芳井馬方選

今新説と唱へ冠附協附
打句重合などこれ
流行して世上の好人名
多く見る新句
いと面白けれ然ども又和合の
ものゝ浅薄入交
ども冠附方

けるゑびすなん人もちゑびす
又ハ兵粮諸道ゑびすハ五ゑびす
とゆゑなくてさのそとゝ
つゝゐ人とあゝ〜ゝ
かゝ付ゆりの白に合ゑるゝ
才智たゝ〜〜てハゝ出ゆゝ
何ゝまハ業なゑゝてのゑゝ
なゝゑびゑんゝゑたハ初ゝゝゝる
屋ハけゝ家附一白家ゝる
ゝゝもあゝゆゝ世界ゝゝゝ

人ゝおゝひゝて家ゝゝゝゝで
生家ゝゝるゝのゝゝゝゝゝゝ
拾ゝゝ人ハゝゝ世上の業理
時ゝゝふゝゝゝゝ方ゝゝゝゝ
切屋ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
学ゝゝゝゝ玉生ゝ指扱ハ
文字ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
特別ゝハゝゝゝゝ奇の
流ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
名ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

廣く世界のすべてをうたせて
おのづから名聞もれものづる
世にすぐれし人まことの歌
一
和歌の習ハ筆の意趣とび
して長門ゞ而と意を通ず自ら
手ざる事意しそ先和歌
を引の爲かさ付の業ゞ才
一ツ二ツ仮名よりうる次
題　絵ッて歌キ
名歌よりの中ゝ多ゝと詠ケ

ゞ詠ゝおゝ時自ゝ先ッ紙
書仮さゞ学べゝ紙ゝを
とゝハ絵ッて歌ゝ多ゝ
どのやゝれゝのゞ
ゝひ出ゝ絵ゞを絵て
歌キ詠ゝひハ紙代を絵ゝ
ゝゝ本ハ佐みゝや絵ゝ
長門よ衣紙を絵ゝゝた
みハつゝ口ゝ板を絵ゝをき
人よあを軒まハ返事仮

せめてにも縮て平に
事有り又ハ魚ハ縮て老さ
やん海を縮て云さかなよ
縮ッて足その肌さをいろし
けくり栄りる化をさべし
肌　広なりて
又肌広なりて世るが広
なる歳ハ場が広なる内が広
毒なりしが痩て身幅が
広なるをいろし顔の人と

さぐなり
鬼　かと思ひて
又かとなりていふ肌或ハ
身上のかとなるといふ事あり
又ハかしこのかとなるといふ事
是り斗りかとなるといふ事
あり是人がかとなるといふ事
あり魚肉のはとなるといふ
多く人の腹ゑるゝを於
みえといふも有る形り

[illegible]

[illegible]

一通りの所ハ大抵[illegible]

[illegible]

乃ち[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

此句ハ則[illegible]人のかとをいさ

[illegible]

かゝるもの

[illegible]

この句ハかゝるものかとをつく

物[illegible]のこんがうゝが

でたぬ人[illegible]の仮をかと

[illegible]

[illegible]

[illegible]の汁を吸ふ[illegible]

その白ハかりを
ぬつてよ
ゆへ問がかたりがこの
奏て住吉まゐ
ぬ うしろ
此弦ハ先ハ
おかしき事ハ
ゆかしの
ぬ教ふ
ゆがよろこべ

ぬう
おの家ぬ出ぬ異服
先笠よりく家ぬ
茶ぬ汲で出ハ正面う
ぬ
ぬ後ろ通ぬ
付しハ上ぬの他ぬ
一句作ぬ教句より入る句
ぬ又ハ人ぬ
武ハ理屈より入る句で

白の紙さまざまこまうの白の
もぐさ紙一ツ二ツ三ツ五ツ
一ツ宮の時ふくろ
初ぐろ廣田吉兵毛剃
ふとこハ紙白より入半分
白とりこ
風呂敷
茶屋がおしむ紙女房
元ふいんより入る白とり
茶一入り

物の巣こと綿織り
ふとこ理屋より入る白とり
たりおこと
匠剥ぎ者る糸ぎ揮
ふとこよりひつきおこ
ぬこ
おこ糸白俗ゑ
和人の為ゑ一二分寸法牧
歌ゑ寸法ゑ迄ひ寸法弘
人生紙寸ぐさ洗ぐるもの

たれをあはれとおもふ歌ことに
さぐり書て宗匠はけそ陸奥
名匂も生来るとのかり余ハ
作者ぐ志ゑ詠し連さ点者
花お合せの時ハ別してかな
まないで作ゑ
ゑ上ぐゑ作ゑ人間さ
ゑ上ぐゑ句ぐゑ上ゑ
ちぐゑて点のたゑゑ
あるなり俗まぐゑひのす

和歌のゑゑてハ甚むつゑく
行ゑハ口のいゆ中のゑ夫のひ
又口のをゑ奥のれにのれゑの
ゑ上ぐゑ上ゑハあゑ上ぐ
解説すてハまなかまりゑ
いゑのワちれくれゑの
ゑゑなくつゑゑかゑ上ぐ
ゑゑハ尚世ゑいゑかな
ゑゑゑゑゑいゑかゑよ
ゑゑハゑ尚世ゑ俗ゑて

くさぐさのはつりせいすり

當麻　当麻　当世

唐人　審椒　湯治

豆腐　茗

みくりのたのかみより出る

乎至　赤ち　饂飩

同　扱

太くまるのうるより出る

柳子　上世　香讓

糊　幸　合　買物

有孝　高　庚申

あくまかのうるより出る

假　紅毛　鳴口

太くまるのかるより出る

遠　諸

乗　中

紙

扇　式字口　くはぢ

しゝくもつのみどりより孫より

あくまかくなる

近江　代字にはぶんと
いとどあハうゝの略なり
あゝとかくあり
第　この字ばくとよム
緣よりはうきとかく
養ヨ　代字もやうとム
いゝ孫ようやうとなり
相場　お遠　こゝの字
はるハそうだそういどとく
ぶもさのかゝるより出るあり

陸奥書狀上

たゝ新しのかゝるより出る
世外ゝゝまぶりひの論さは
所はぶも精詳家よ返角
乃あゝまゝ法ゝさむるの
一白代ないせんとおりよものハ
先玉生よ陸分人のゐと皮
まゝハ集本書ぶんゝゐ
ゐ法味ハ尾一板本法
ゐるゝの所ぶるゝ人もあ也

ど集冊とつくるのもあ
句をあるべきよりの次第を
きりの句の姿はあるべきあるべし
その上にそ自分の功者と
ふ功者にそなりぬ絶えぬ
多くは人並なく時は自ら
名句も出来るものなり特集冊
先近頃多くはこれを始め
かるものは只今時流行の
冥加句と集左のあり次

題次例

一 いそぎひ　二 金かなし
三 いろはの　四 ろうふ動
五 一句なん　六 去で来て
七 入り羽ぐ　八 いろふ
九 去れで　十 入ぐー
十一 色付けて　十二 論よ及ば
十三 罪ぐ高ろそ　十四 はるをく
十五 ぐつくりと　十六 ちるかこの

十七 二三度ハ
十八 あまんを
十九 汗だらゝ
二十 袖よ注て
廿一 宴未うゝ
廿二 ほそ〻〻て
廿三 へイ〳〵ゝて
廿四 魚ゞり付き
廿五 死んで出て
廿六 こうぶ来て
廿七 どの及ケ
廿八 どもんてる
廿九 ろゝんぐ
三十 ぞ部と法ハ
卅一 仰ぬぐでハ
卅二 こばもりて
卅三 チト悪しや
卅四 近付イゝ
卅五 ちんの居や
卅六 遠ゝ陶や

卅七 ちゞつて
卅八 流〳〵て
卅九 ぬぎゝけて
四十 ゆりえて
四一 ぬゝりと
四二 爲ようて
四三 悪ようゝ
四四 常解ゝ
四五 ろゝさゝりハ
四六 おてゝ死ま
四七 おゝてゝ
四八 見てゝ
四九 おゝりゝ
五十 おゝりゝ
五一 ワゝるゝか
五二 ゝゝさゝて
五三 信ま
五四 格ゝ
五五 かゞりゝさ
五六 かゞみゝ

五十七 かさげさを　五十八 さくし紙元

五十九 よくえんせて　六十 よハりくを

六十一 よくし四ハる　六十二 紙もあり

六十三 ようかさあ　六十四 弱くもあ

六十五 ちをくし　六十六 えがいあり

六十七 抱合りを　六十八 てみくを

六十九 えテ抱じや　七十 大そうな

七十一 大ゆの和じや　七十二 たくさ一安

七十三 ゑテ　七十四 そもしくハ

七十五 そよ不ちよ　七十六 きよハ喰ね

七十七 きよ和ハ彩　七十八 えよつき

七十九 きを不とかさ　八十 ゑをおや

八十一 ぬんで亜　八十二 附色く

八十三 つくもびじ　八十四 費ちと

八十五 附添よて　八十六 急だを

八十七 何くし何ち　八十八 何ちや

八十九 何ぞよかロ元　九十 刻て来て

九十一 何ようち元　九十二 何なさんを

九十三 来まもそ　九十四 ホくと

九十五 何ゆ月あ　九十六 むくハう

九十七 ゐるまやて
九十八 文合ふく
九十九 文合まし
百 上へよ上へ
百一 うるさうて
百二 ウンと言し
百三 上へぬりして
百四 言つて珠
百五 呑上てく
百六 呑ふんで
百七 のらぬ
百八 立合色キ
百九 くさり縄
百十 くどんし
百十一 ぐちつさ
百十二 くせよあり
百十三 くでとあり
百十四 着物を
百十五 嘘して
百十六 書ふて
百十七 約束して
百十八 ヤレ別やの
百十九 男とまり
百二十 山乃中ふか
百二十一 る遠く
百二十二 毒ろく
百二十三 る土ゞ来て
百二十四 てア左ゆう
百二十五 みうんヤイ
百二十六 結構なる
百二十七 ふせうぐ
百二十八 舟よ乗り
百二十九 ゆり揺る
百三十 ぬくまして
百三十一 二タ左よ
百三十二 ゆり呉じ
百三十三 ゆり動く
百三十四 腰さもり
百三十五 こうかせば
百三十六 ぶしみて

百七 乞八考う 百八 爰で老
百九 剝がし 百十 見切じや
百一 乞ゲ否や 百二 爰弟でも
百三 呼ばれく 百四 もと戻げ
百五 偽接もの 百六 ゆう今
百七 天狗よ知り 百八 ゆの刻で
百九 てんがして 百十 弟をもの
百一 習をんく 百二 ゆんくんナ
百三 義おもの 百四 義を
百五 味付けて 百六 まくと

百七 集ッく 百八 薬ざまん
百九 訪先見て 百十 サアなまくぬ
百一 くやいく 百二 奉いじや
百三 ちをもの 百四 さとれく
百五 さすりし 百六 二人ぐ
百七 左接ンナ 百八 をむ然で
百九 きくくちぐ 百十 光稼も
百一 乳かこと 百二 疝ぐつき
百三 疝んせく 百四 乳を近て
百五 吟果伯而 百六 くくてつを

百七七 吉凶
百八 こんくと
百九 池防ハ家ぬ
百十 りぬが勝チ
百一 ゆるすと
百二 指さえず
百三 タベの
百四 肥きひで
百五 女夫
百六 ひとりし
百七 兄うしみい
百八 尻こそゞ
百九 ちゞまる
百十 ゆきれゆる
百一 志あて任表
百二 辛ゑやハ
百三 屁ふり
百四 辛抱せん
百五 志ゞし
百六 正月ぞ

百七七 ニウ
百八 ちゞいし
百九 ニウ
二百 ねよ入り
二百一 虫をくい
二百二 ニウ
二百三 ちゞゞ
二百四 ちゞ落し
二百五 ひつそり
二百六 ひつそりと
二百七 川イ
二百八 ふりめに
二百九 ニウ
二百十 ちゞ
二百一 ちゞ
二百二 モウ
二百三 ちゞ
二百四 ねれ
二百五 モウ
二百六 ねハ

(三十七)モウ様ろろ (三十八)世話あるべ
(三十九)ぜがろ五ろく (三十)ぜろろ様ろ
(三十一)様ろをろぐ (三十二)変なして
(三十三)発ろぐじど (三十四)かしゆる先
(三十五)ぬかく (三十六)ちばあるま
(三十七)助人がろう (三十八)京へ行て

形送出用続

(一)いろがしひ
夢ハゆるまのある仲右
二の膳汗ぐ吟丁児
仏極居へろ笑ろ毒
儒所も社ろる夏男
捕人ろ出る様のチヨボ

(二)気ろろぐ
庵の純之ま紅既
ま習ろ乗ろ乗ひ様

喰ふ服薬よめ丹奇

(三) いろはうた

夜毛寝つく薬よ嫁
凝ゐ嫌かうるに入
寝ぬ恨しユ合奨
投ゐも意ゐでゐる寺さ
小金仲士ぐんせる夢

(四) いろはうた

子ゐも意の意イ大百姓
巣石の喰ふ坂の拳

志げりか甲斐の意イに入

(五) いろはうた

ぶる肥多よ蕨屋の屋
せん屋喰てゐる仏の戸
小戻る強子笑よ毛刹
札ぶ〳〵奨よ法テイや

(六) いろはうた

味噌屋ぐるよ入る新語
線毛ば立テて笑よ歳よ
夕べ丸を与る乱り祝ゐ

連ぐ下駄早ぬれ形者

七 入用さぐ

素かさらふ女ナがさ

蓋抱絡りがゆく雪文

泉ぐけ汗を巾ぬ干し

仕ゝ乳の毒ぐる家主

八 いろかしてもし

麥屋連る傳者の場

豚と伽ふ足入ゝ医

服鏡のゝ巾用利

法事家具借ゝ乃者宿

九 ゝ本ぐ

書ふ表紙の去ぬ五行

川ゝ写ル形紙主

風呂ふゝ飽く尾張宿

仲士ぐ法ゝふ仕掛

十 入ル過し

菜漬の志ぶい書ぬ主

菖蒲の死る床屋の床

祝服蔵ゝ法く多屋

後注義理の見

(十一) いろ付けて

安茶うせぬ真日型屋

老もの活を表店鋼

活を仕込む絮餅屋

(十二) 論ずるに及ばず

毛糸拵る蓋子の肩

橋見る去ぬ合い算

破砂の喧嘩迄く遠士

(十三) 罰が当るぞ

無茶よ実り所上り

喫の汚るを切る脊負

毒汁ふ長く流れ

小活の鍋へ入る幾り

(十四) はまる

生入の止まる情ぐ多

振梁の却る新油石灰

世ぐ多仕もる新田当り

活ぐ孤ぐる粗文

(十五) だつうと

悟ひ拙ヶの矢ぶみ書
揚の拙ヶ拙ヶ子等
独り嘆き玄んざ拙ヶ屋
業ぶ秋つぎる屋乃宮
狭地の呼る猿芝居

十六 生活ちまさに
石ずの陣元る左文
滑見る書ぶ業て種
地屋業次ぶ市ル返り
十七 二三変る

合ぶ手繰の入る百姓
ちんるおとおりよ嫁
書墨よ拂ぶ屋

十八 ぶんぞ
ぶんるる文さぶ祖文
拳のおへ絵ぶ見
拙ヶの小使多寄

十九 ぶぞうし
大変な味う呼ぶ業淫
亂の弱仕る丁児

小鮒肥

立り出へ急ぐ悠上手

(二十) 咎よ性く

乗の夜文を義屋牛子

金イ乃具官小家元伯父

二日小菓子を減じた毒

序よ文の月居る伯母

(廿一) 家来の家請

流利に入しる家請

咲く福毒菓の急る毒

居さ根を活く寡婦妻

(廿二) 汗そ性て

縁屋へ下卑るれる子家

子代の家号を赤打る俺

伯母の借錢免く蓄子

々一文十毒鼎拾ッ雑屋

(廿三) ヘイ〳〵居く

情気系よる戻り

六の黄ひる回〳〵

返ず笑へぬ百乃海

孤獨者を毛剃てめく友

(九四) 屋だうつつき
蕨ひきぬとする友碧
風呂ハ起きく起きぬ鼠

(九五) 飛んで出く
えを失ふ赤かいる瓦
おどりを汁ふ松ぐるト女
かをおかしい猿芝居
白歯が焼ける巨燈のを

(九六) とりぐ来く

濁て絞りたぐる母
をよ油所せぬ古金屋
揚乃家をる法を立
娘へ女孫ゆげる母

(九七) どの屋ふ
迷ひ家が傳兵衛
掛乞イ喜へ俺る本戸
子を亀ヒ伯母喧嘩抱の蝶
巻る紙を活る小の伯又
妹の気ぢん呵る母

延を乗じる紙坊主

(廿八) どうしてもこの
仕事を脊屋へ頼まなければ
喰と勢が
女房へ但を小紋帷
洞の乳の毎に更格子
地漆を本の乳まで毒
鉢のゆうしゃ能寺更

(廿九) とくんぐ
鍵盗まる養理の父

[illegible]ぬ料理屋婚
幕の人中ゴ出を嫁屋
祝又どんの元り去祝又
三百月依々る中風邪

(三十) どうまと仕なハ
迫て異且快裂仲五
私所へ今ぐる鉢り迫
且形の去へすゝる素
吸屋迫しゝん整子

(卅一) 何所でぐハ

癇へ織物を按ず
止めぬ涙なき痛む男
半差丁児のごく床
大酒を呵る伯父の医者

(五二) とぐ土りで
妹もそうまきや出ぬおどり
童別るぬいぐ情家の下女
やん年寄り勝吹屋の子
繻伸吹屋る蒲鉾屋

(五三) チド照しぐや

藪医ぶ隣へ棚
篭引をまつ繻物造
家業養ふ合婦
初日嘘の合りぬ琴子
仕立もの表板出れ丈ト

(五四) 近付イて
裾の破延を立伝医者
床を泣く破換格
ものを呵るいぐち婆
京漬京人長烏帽子扮

遠く流れを引く船

(五十五) ちよんの名哉

居候へ近く名乗の耳

鯉洞の口切る料理人

芝居へ通べる文藻中

又合イ 仲人の赤さ扇子や

仲居を招く料理屑

(五十六) 遠ちあもや

柔河ろ戻る小孩姫

笑よまる 結ッこ甲斐

古丸の義理を惚る伯父

本書 照して去ぬ告人

琴の音 法味 根松麦

芋えのぶ 訛を去ヌ口入

接穂えあぎる 松の跡

(五十七) ちゑつ

味噌も餐る 帰系の後

泥を芋 石女毒

柳清 月出 且形

偽 蔵 照 夜 習ひ子

息子供を出入仲土

(四八) 流しくでで

蔵上戸後の焼絵屋

親母へ深よなる毛剃

(四九) ぬぎすけて

弘法の素湯香炉古文

柳元に毒の月囲ひ

毒以へ羽織夢生碎

大きな屋敷の市殿賀

(四十) ぬりかえる

蛸の眼よ立ツ家間屋

去佛毒撫む反抜ケ

美屋天竺の近く金剛

(四一) ぬらくらく

一撰香る辛抱舞

毒毒かしく脊頁

得ひ濤ぐ出ひ安歩

(四二) 爲立老く

払ひ給ハぬ神そと者

素く友へチャル寡日庭

掛ケ乾り
(四十三) 恵小豆煮
深き深き深き
世ゲケの世ゲケ小豆煮
君夫よ生ぐ子ん生ぐ
海次郎譲ら巻ら海
(四十四) 蕃解ら
鉄蕃の味ある白歯蕃
重ねるやの形広ける毛刺
蕃切り抜ける女ナ形

萩見の高とまつ高
みやぎ減しと毎の紙
(四十五) ろふるよりハ
蕎麦ぐ悦ち海重
味噌汁ぐる通ら蕎
藁編ぬ刷ぬ屋の賀
呑む又見ら義俺人
(四十六) おそまる
長京喰ふ来ら鯨汁
殺日世話茂ざこそ京

暑り者こゝろ三ツ揚げ糸文

四十七 おちらさテ、

糸の縒突くチャリ沒り

筆連ゞ爰ゝ出来やれ根ち

時所さゞ〻家祝仁

夜おれ文文鄭永以

色ハ偽毋時ゝ田柱嘆

系孫の稗義ある親ゝ子主

蒔皿ハなる高後罪

時叔法くゝ時入ゝ後

叫ゞ形り高ら親向の礼

四十八 爰ゞ

祢母の歌好ゝ法く原右

左爰ゞ世話ある迷ひる時

挑えり下ふる仮系の仮

爰孫苦ゝ世ゝ木孫爰

四十九 おりしろ安イ

天山爰子ゆく矢茅

仲人の子ャリと呼る代

迷孫足ゝ爰ゝ儀りの函

世話坊又侍を云ふ事なり

(卒十) おかりをも

其の名へ苦の毒イ様の又

仕ふかける茅へ拵えた嫁

着る日へ拵れる孫る

風の為さん縁記奏

外よ表ぬケの迫ひ毒

出て表へぬいさ白ねづみ

(卒一) ワラを加る

その毒に洗風伝奏人輝

傷者困ッさ貧乏札

まゝさ出ハの為る木戸

洗ふ毒へ拵戸牧ム毒

(卒二) ワラをうを

毒よ易料傷るお針

拵広げ毒出を表の昆布

茅屋ぞ好きを泣く拵戸

おゝ山へ表と日よ見るの奏

転を上げ毒を求ふの盃

(卒三) 傷し表へ毒

叭会の都吹イさ毒
附ロく撥毒へチハ楽次
小俊蓋人へチャル表舟
おの楽うづきさたぶる床
四ま粉と誘う系合舟
ま〻蓋よチャツさ臼の目や

卒四 梅ろかう
見のおそめル島蒲うを
名で呼びロんぶ猿回し
ゆどうろへ見ス毒の三味

泥利達士と寄る茲や

卒五 かちうさ
七ク助ろる舟大工
米の入ろうる二三板
巨燈のぬくい炭仲士
法沙へ寄材換な葬屋

卒六 うぐみろう
新あの冒どる美旦那
者引女ぶ湾さハ方の竹
小俊よ立ツ上ハ撥蓋

そゞッと　拾ふ雛の家
屋敷を去ぬる床の宮

（平七）かくさげさせ

見ぬ事ばかりまれる好き実
奴成連しさ能雲武士
備屋足歩り友毛利
抹梁よ寄の見ゆる幣
隠居が実よゆく歳者
小紫なまるく見る両碧

（平八）よくく能イ名

矢都で這入る孫祖り
指へいふ傍ス賢屋
問ふさ毒で止む佑芸
ケ伏賢屋よ居ゆ下女
呉さ傷去多よ古九掛元
内ゞ芸長季なる家以

（平九）よくうさせく
舞へ古筆と芸く系器や
科の方上気古敵
ぞ分へ〜に孫ふ家居下女

子しく名所三ツ後沙の掾

卒十　よりうを

ちんだぐぶ揺ぐさ長蝦

後おや赤貝生きり

金魚鮒長く信毎丁児

卒一　よりうを廻る

子へ油断せぬ出合イ毎

三味線古ぢめ友仲士

永代の芝量参る茶屋

輪参ぐぢく一文几巾

ぢ仕ぐ元丁児多ム鮫屋

卒二　鮫りはすり

強弓堂いちく安屋

人中蕎蘇生さ仏者

ふり七二ワカ呼ぶ士

初胡瓜買ム者仲士

張り金ムふ空ガ勝ツ牡丸

卒三　よりうを似さ扨

あり方イ鯛へ麦仄の那

三ツ井の紅ヒ入ろ家

石丈の気ちゑ仲右
朝森寡と第一毒

(六十四) 弱みをめ

罪ゲ封切る弱虎糸
爰中ゲ見さうんが奢
太老尾むく弱る丁兄
矢慶ゲ活ゲ系芝尾参

(六十五) 古義しく

家日庭ゲ挽ゲ淀屋格
白刎口入の濃北寿

服の茅野北板木服
出ル嫁を入レる又
礼きせる拍ツ古重屋
西陣庚る囲ひめ
京仕入雛参る女丈
入歯屋ゲウ庚る又

(六十六) 寿んがいたち

垂る屋紙服く駅仁台
雪の日呵る毒の母
沼風呂中毒ゲ急ぐ月

皆冥ヲの玉泉清るげる
湯に人が多く続の毒
口ぬケ高坂峠ノ干瓦
毋へ引キ度吹ゑ子写

卒七 抱合セ

抱レ木 活る池の坊
代呂あを干ス坂乃下
家賛玉なる傑に入
いろはとエイてゐる下詰や

卒八 たこうを

素麺ゆでる五月干
掛ア入ル出し乞ア賛瓦
朝ノ下落ル出る格東
上ノ下餅ア作る毒
家の二東かる美世
お高とまゐるさのや掛
碎冊坊立を花の毬

卒九 立テ おしゆや
何るる写まえ合ゐ伯父
様よ玉のかる肥後仲士

和るの脊拵る毒の伯母
らくさく破りた下指
姉の性気と拵へ変級

七十 大そうか
遠糸僊チャル菊不藝ま
一衣の砂奥より女丈
長家ごけゆく毒の礼
落チこんを高へ居る条

七十一 大すの麻ぎや
うげ寸ケ諾をる茶屋

洗せぬ名よ家の技家の物
刹る難呵る売メ函
又ゲ利落ち丈附ケ

七十二 たうさ一衣
美元ホ丈変ちさ伯又
棹ゲ淀んざ炭屋町
毒ゲ有て元さ深遠ル

七十三 意てやり
魁ゲ眼ちる年忌不低
又チての ふ自空ちる吉丈

隠くまのめるい玉藻子
まうぐるみ舞子へ惜る撥
をを毫い耳の遠し姑

七十四　そもしくハ
濱蒲戻りを泣く古濕
チョウと綻びる隠れさ縁
遍塞の素あ惜し一ッ家
門徳く拭持ワ下兄
謡座惜しおりし又

七十五　そお和コ元イ

塊蹴けりけきぶるを車
雷引女振切るまぐを連
膝へ来る三毛抛る二月

七十六　そもハくハぬ
吐しかもしの捕戸
暗信かしこ戻を者
おヤへ西くりせぬ寡
毛剃ゲ撰ワて考る毛貫
正高玄ナ寺玄奥座
本召ふさす伽羅奏

たとえれ去儀とする実

(七十七) そもそも和ハ新ウ

毛剃の服元る指の株

車産の孫出たる孫

指又せくみる札織り

母へ小声かなる使人

(七十八) 丈夫ものを

既元りぶ信る実の耳

仲元ものている別家

古丈の新もしる強母

左而の俗又も寿る忘明

(七十九) そもそも和おさく

芸ひ人よりる実乃操

初人者へる丁児本

まち所と法を家主

小孩快仕ひ切小女良

家引きよ立ツ格子撫

(八十) 序おやて

見奉人遠函さん幕湯

而中も法よ料戸の祝酒

江戸もとて来る陰法花
天元の文字遣ひ形
(八十一) 法ゝ花経
おもゝ書テる毎日書
沙弥の揺ぎかに入の座
さん用紙書る南禅寺
元和本ゆる辻易者
言葉言る問屋
(八十二) 附記キく
大衣が俗る加減咎イ

耳へ色の状裂く反駁
変ゝ戻よ戻る茶屋
(八十三) 法ゝのいぢや
法会料理やぶ寺返剥
勅化後家だて注く和尚
衣変るゲ侍よ入皇代
彼岸の茶の子法る菊医
その六ツ地みゝ文ゝ磯
(八十四) 黄貝なる丑ど
五十前へ見を機屋具

挑灯矣りて瓦口入
表以の碍もする蕓子
ねりの奏る拍子陽
様を上るよ垂切矢漆
数結布拍る法海の書

八十五 附き添ふ
子のやうか喉に物風呂屋
亲子の親乃教よ蕓
兎上り蕓摩詰呂る又

八十六 急に倒し

合ね干坊へ来さ久立
近に焚をくよ手伝人
柳釣り助ぐ割さ鉢
坂家拡尚家の遠善舎

八十七 何うも何を
宿習のやうな毒丸接為
出ぐさ婆ぐ仮割る用
家金と拍ツ孫人伯母
法ゑ芝こ文およ
仲丹の世話な白蓋蕓子

又のおうい 接日記

八十八 何ごとやらむ

えうく来る芝居咲を実

女芝ゝが訪ふく知る孫

去年を汗ぐく母の歩

新藝の看板る第五

八十九 何ごとぞ公ロ

迷ひ子送ゝく来て毛利

根附河へ入せる枝柴木

俳者へうるもも浪居

面目ふんまチヤル浪居

書へ越飯第六又

九十 別ゝく来ゝ

物もはゝ用てゝ紙屋

貸屋丁四ぐせぬ中けど

廓の婦の状渡メぬ母

九十一 何ごとぞ

百士が冥ふ戒名出

連欠びさん鏡の毒

二日もゑて乃奏

小指を立てて

(卒二) 何おさんと

ものれも指るる矢流のる士

絶無ん〳〵立ツ家守

まるの歌〳〵見音〳〵伯父

情〳〵穂先チャル絵人

(卒三) 来年ハ

見人所〳〵辻易者

枕へ指二本指〳〵る表

(卒四) 楽しや

おり〳〵見る芝居

おこり諸〳〵を指〳〵雫次

(卒五) 向ふ月安

粹へ時代かく〳〵お山

紙の云ひ恵の遠ふ干

書よ吟交ぜる辻易者

位の初出取乗宝やの奏

莉賢の膳ハ濱ち居へ

附の玄キやうの表ふ出る家や

(卒六) むういろ

利キ目の尺さ汐治の高
既痛の歩るる楽既拍
尺四寸て這入る傳去の伯母
七月め勵ム元り出門士

(五十七) 一るぎやテく
大木戸這入る坂難炊
表庫筋チヤル鈴掛广
出茶仲士ぶ尺入る羅
下戸冥の唱る後の月

(五十八) 文令ふく

坂家ニ入状を出又重別
京ぎ去出し笑ム毛刹

(百三) 上ハやりて
ふくふぶ泣く江戸風偽
ふ雪り荒角力泣く細字
ふの縁人泣く縁治や後家
亟屋庫出ル言歩借り

(百四) 奈ッて来く
見の辛反イ門曲る
あぶ子ョ去ぬ添左衆

座で酒買よ買の仮文

(百五) 呑上て

菓子屋払ひの多い菓子や

よの定つる月貫勝

(百六) 呑四んぐ

ぶり出ろうに切し宿老

芝居へそれる後家の供

一ト鞍ふやを駄にる士

芸ゑへ掛もの屋

白服幕よ去ぬ矢度

吹キ智へ化の呼ル分才子

妹仲居ゞ智 砂

合イ三味ゞ活も夜のふる

形かて学る厄乃女

(百七) のゞぶ多ひ

弱菓漬子賀屋弁母

二度の紙持ツ多且那

恵る米注く士仲士

吸屋ゞ咲る大蠟燭

まつけへ注く髪見函

佇りきせる多ふ庭佇り

(頁) 立合ヨギ

ゆバ且戻りゆ吟ふ茶漬

雪涙ぐむつち泣く日雇

悠人の剛ウなる表み

(頁) くさり縄うも

竜井出る雪士鼠ゞる佇

課ふ景の妻ひ火才

居いの精を多ふ書

見の勝負嬉ひ答る妻

(草) くどいし

月貴の日延嘗く奴

美り状の名べこ雪る士

口入の江まる涙紀主

日扮の名と多ふ研町

(草一) ぐるつさひし

強ゆき矢尚出る久三

内ぐたふを洗ふ丁兄

門入まる老女房

用紙泣ふと年奴坊ン

八ツ時斗と申くらはる屋

(夏二) くせふかり

汲ム菓の石ゑる油麦

白石行キ淋しい情面

素麺も噛ム設古文

家主ゑこ勿と役者衆

(夏三) くで屋歩行

年礼ゑるがいとよ天宮

俗潜ふかル景気職

麦とゝの喰よ哥小云

刷ゑるぬくゑる布ゑ賛

(夏四) 芋加ゑ

斤秋の色い沙克撲

挿ム広へ切レる紡孫織

六の生く来る萩の菓や

(夏五) 噎して

俗又〻宣森と記る後家

名灸の出しゑ書く木下

矣よて仕回る いとゝ共云

(夏六) 書よく

芝居く仲居買ふ仲居
服鏡のふい大変以
翌日の雑費も掛ざあ
芸系統家繰を教ケら是
八文奢る病掛る士

(夏七) 約束しさ
横町と去ぬ帽子買子
嫁沙汰の元九鬼子
安治川海辺と去ぬ貸や
(夏八) ヤレ別やの

内の系漬と呼ん買
癪の網まるふっさ掛表
貸屋ぶ借ふさ敷亀甲の眼
横宿を戻る店代
反ッさみお母へ戻ス要
立テ家とうる系謡ひ
(夏九) やりとまし
嗅ぶ出くの一発ふる士
又又屋仕ふ出さ呼屋果
内の菜発ふ祭や呼ば色

這出素敷ぐ連る毒

百二十 山のやうよ

奚へ素麺蒸つゝ母

二月の三宝喰ふ風呂屋

利医沙法る焼餅函

蕗葉餅る紀列宮屋

店ナの菊入り多本戸

百二十一 月遠ぐ

衣羽ひ丁雅注す猫

好この上への深つゝ素油

後家親と多ふ舞仲人

毎日素漬喰ふ豚屋

百二十二 素中のう

結の能喰ふ差且那

舞ふぐ捲さ堂因士産

幸叔の足ゆる楽太被

法中於うる米示与

百二十三 一る士ぐ来ふく

元亜於切ふさ孝訪臼

寄引女ぐ中ぐる毒代爰

喉の橋罵ふ京の町

(五四) てア左ゆう

指つる手拭を辻乃者

生るへ眼と信ス生花の油

て拭る清玉上げる贅女

嗅ぶ乾出イ世黄ゝ書

さ直ゑケ先方ゝる夫

(五五) ゆう

小便ン犬清ッ供ヒ丁吃

脂め拭玉を猿回し

ちづくる和尚吟且那

絶目蛙ゝ玉の汁

(五六) 孫諫家

親又荷拭チ狭ム情

社皮ゞ和尚ゝいろは家

物素上ゑめりへ苦ゑ又

(五七) 奴せうゝ

兎柿へ撫る小便ン弥

奴ゞか苦ゝ八弁格

毒ゞ傘信ス触女房

(夏) 舟よ寄り

見の幸なうなる兎狩

招くの芦毛を多よ毛刺

仕事志ゝ有る戎俗

新酒味びよ多る湊志

大招をびる俗母丁兒

(夏九) 寄り捨ゝ迄

お稲伸居と碓上俗河

糸舎悦ぎ志る奠屋

布袋の義志る表接祢

濤よ志んなり捨ゝ猿

蕊の捨ゝ志菓石姉

(夏十) 幼ゝ

出世語志る八百屋

源居有く出を白歯蕊字

居ひよ論語を伝又

初人へ傑を呼び連レ

接麦へ俗を絡志後家

麦お稲ゝ蓋遥者

帆下タ風彩川蓑垣多主

(嘉)二タ巳よ

子と出さおそさ信女房

為丑の厚い寺八百屋

蛤えりゞ持つさ塩

口入ゞ通よ後家銀主

(嘉)ふり迫ハし

蔡恪乳さる紬坊主

首の否分な乾どう婆

結気結家ふさお板

晴蛤ゞ見ゞ絹ろんぼ

一三十

押ひの鴉多な新宮屋

中風へ見せる樹ゞ乃香

茶席おうしい新口入

瓦さ楽次ゞチャル芝居見

鰍へ迷よ尉絵所コ

(嘉)ふりゞ

鞆へ孤獄の活る平

警古賀る町へ嘉ルる信母

三毛へ鰹を減しさ毒

浄干の恍多演芝居

(百四) おしはもり
茎洗ひ去ぬ出入り婆
借り絵背武士と男と抱ア
花月和泉く毫髪結
むげん豆腐屋づつかぐ猪
利キ越嫁の去る髮取屋
長ツ屋リキガ借ツる店

(百五) こうもせば
一枚着るとき逢ひ戻り
そ家の舞も能イ男

一ツ家ハ某業る抱ア
素人組主ガうる在組

(百六) こうけて
新斗り洗ふ義を文凝り
針仕業をる勝海舟
流リ冠帽ガ泣く森丸
下針助ケる乳茨ひ
嫁仲人をる動化婆

(百七) 先ハ走ろう
丁児の天宗移ゴる助ケ

十夜の屍と接る濃
梟垂しふ多て玉の皮
万巻へ牌抱迫く高
そう分はまんど糊黄い

(亮)
ぎぐぎろ
敗日風呂屋ぐさ
働立 赤を 木綿買
爰主ハ事知の執 詩和

(亮九)
剔かづし
何ンかも云ハぬ大蓑以

子指チが入る高い
灸上戸な氏野屋の海
祝くる迎ぐ沢痛蒸
(亭)
見切りじや
沙神灯ぐる奥や
日かづ状の来る使や
家築る拡さ言イ附ケ
大名へ走沢拵切風呂
(亭一)
見ぐ否ぎや
黄沢桟敷へ来る見蓑

風呂敷か　池ノ先
火を仕る書あがり物
接ぎの書原ある冥
京名示見ぐ　叩く足
（亳二）　夜多でも
お山屋多ふ　桃見毒
冷しへジャ試見せるざる
特奇と書く　糸玉巻子
（亳三）　買てされる
紙の白ある　本納猪
鼻の形んざ　餅玉物
ハくと出るある　毒蔵玉
（亳四）　手試度げ
笠の様ある日　幾貸し
泣くみ　ハ小毒さ　紺屋
年の云イやうの　な毒る
（亳五）　偽換　もの
出来ぬ手書と　チャル毒次
勝の巻人へ　チャヅさ　八漆
呼び粥　チャル　賀屋

(亳六) 出さうとうの
を不ず待ッて花ぐり
外ケ迄は物さ殿賞
様子敷ける才ッ嘆
ち子孫の
未所ちよ炒ちさ
家カのかさん越掛ケ
魁ガ汗ちふ堅芝居
(亳七) 天狗よなり
仮者の家号りふ高ケ

を性の減ッさはんでぬ
形母の居ッさ粽老
表中は嘆の鍬孫ふ壽
(亳八) まのひちで
四美彩の徳めする百姓
寡ぶらくな煙けちし
ろの脊中かく苅割祖父
発よ扣を立ち八年
るの屋ふむ紙後物ろ
年シ乃屋せぬ大学かくろ

(五十九) ちんがうして、
賣ゞ雪して奏果の売
嗅先キ立テ〳〵生業屋
砂糖屋へちんぢ引く丁児
下女よ遣ハ旦て玉焼屋
麺の系漬拵てる毒
焚ぬき〳〵屑〳〵出る毒
坊主蔵寺屋よ減る机
嗅よ外療嗅ぶ薬刻
(六十) るルものゝ
凝らぬ浄るうゝむ友
書ゞみうさゝ家具講入り
嗅屋へ軽む麻病家
忘れへ贈なる先ンの函去
(六十一) 百ゝ見ゝ
おすやへ巻る鯛買ふゝ家
清りの生なのゝ稽古
入れ札蔵を薬書清
松よ産碧へる月の寿
搭の極まる拵母家拵

百五十二 ふんな

糸へ弱ひる出合い気

を脇ぐぬけ誇虎気

脇えへたぐて強ぐ毛刺

貸屋の一財多ふ日を百

清十数以内へ宮ろ人まる

百五十三 義ハ まみもの

鯨鯖奥の足春雪実

掘製へ チャル芸麦仲右

ざこ森の舟乃玉素脇

お金イ筆で売ヌ出ひや

売義人セる約庶り

百五十四 義ハ なり

後家のまおうさ後家

祝仁乗以ぐ接ぬ揺ま

実ぐ食こみる一扶捻

耳の法ちさ芸売麦

米の飯食ふ小百姓

清粉造と森る差兵粉

続く友多ふ小家歩近

百五 味付けて

変改易へ物す母

豆腐と紀屋嘆

三十九と作る法家の子

百六 まるくゆく

髪と笑人の附く達士

蟹昌の足る八百屋庭

おもくの猿る五日の後

さくの格ぶ東福寺

物番拍子庭乃景

百七 集ッて

菜せんへ麻のるそむ毒

淡へ礼る淡角力

屁風の喰な賀祝ひ後

南瓜ふまる地蔵菜

初日のきまる勅進元

子よ名仏付ける接地

人冥ひと治ッ池縁

嘆の気笑る接ぶ者

一ト腰竭ま地堀出し実

百八 素ぐさうハ
母とゝろゝぶ姓の素
彼岸の煖ともぐむ母
又の粹煖ム又まぐり
去聲ぐゝ助織る言士
麦ぐ疫徒を小刀屋

百九 孫先見ゝく
子安地蕗を翁む蕗子
菊医の呑ぐ言又素
出る智恵備さぬ婦強さ

乃丸細工ゝ乃月東
二立月狭む寺花見
麦以ぐ遠八る素蕗次

百十 サアたまゝぬ
まぐ振る拳又素及の蕗
子角おぐーの吹くま角
右被拍て素さ被ゝ九所
恪気の敢学りゝ通る又
友蕗子教ぐ絢り麦
戻る徳利へ清ゝ自左

迎ゑ夕立と見る窓の効家
追ふ追ふ猫犬立つ猿ひ
芸屋へ指を折る客

(夏二) さくやいさく
思ひが新しい接ぎ乃夏
供ぶ出切れ入遣ふん
盃まりん 第嫁
坊を囲ふ見る桂川

(夏三) 夏ひどや
拘絨しが喫ムせ萩の名

左衛の見ル帽表蔵表
去びりの切にしさ心り糸
返す対して切りやめ
花ゑて去ぬ石伸士

(夏三) さくるの名
掛九りの伸く薄新場
本百の夏女もれる表表
古夫へ見せるうしれ本
剥ゑ表ぶ表る絆
夏男が挽さ蛍義

百四 さとうまき
柳元助ケのやむ久三
とや古屋の出せぬまつ
兄とり迎ひに二日参
春の陣茶ゝ海老屋
百五 さとうまき
矢慶へも塩菓汲き高
高板とうむ新伝
八百やの美足る女房
百六 こんとぐ

雛へ参る赤の涛の仕下
赤のヨ出来る中る
中られ屋紀を七段目
駅の揉くゝる湯鯛鉢
流を汐ゝ赤ゝ下女
蛍本居ふ云る婦
百七 左打魚いナ
ゝ屋足赤ス参り下女
お針ゞ参る染赤し
高ゞくり庚申糸

(百八) 蒸むしかつて
花車のふ蒸変差且形
目利し吉と書く焼及
汗うつさめある足袋やを
紙袋下戸
(百九) きくとすぐ
そ〜がる喫の毒る長家
吸ケさ居み又冥氏毛剃
猿用意せる凡せ物沙
稽古へ来る穏り気毒ケ

(百十) 考掘もあイ
仕の添へ乃ま弟易去
通ぬ家ワ〜よ素敗連レ
金否で来ま友鼻ま
兄のも笑ふ〜考る蒲
お凡る家ぐちある芸ま
(百十一) 気かこうる人
江戸の冷雪く肥者の母
志鼓凡ま出清雑婆
主坪沙法雪く行り伯又

勝負付ケ結ッ搗仲居

(夏三) 疵ガ治ラヌ

姉ヨ果ノ子遠ノ所

家貧歩拙ク臭ヲの世

八尾ヘ嫁入リさす雑や

一チ輪独ち前連かき

(夏三) 疵足せく

本玉自慢する下屋

さん考出しの入六部

生ケ梨子セグむ八百やれる

(夏四) 乳ガ近イく

蒲の蘆ぬん蒼

西瓜の駅利ちる系黒屋

又の日書ル瓜丸無蒙

拐足活ぎる女ナ函者

(夏五) 咲キや何和も

子よ治る寄り活く子数

考くまで見ぬ人盃屋

夜ぬ考の人下一ト ふ雲

さくにつを
嫁へ乳がるひ夕時凝り
女房のたぐる下駄の罷
扨迷ひム儒者の伝母
まぐ皮膚爲ぬ酒や涛
内誕の者ゑ見るるやや
祝仁の年のおしひ小
美世乃歌も出る旅業
るイ芝居をうる遠士
祝の恩しる偽蚩り

さて出
巣へ角拭振る山の非
拶レ蕊の励ム喚ム仕事
本卦を縊ゑ粉ゑ薮医
刹しゑ祈ゑ喚ム槌屋
縊りへ毎日宮ゑ日ゑ君
内の用出来ぬ小伸士
みゑ爲蕊へ刀ゑ山ゑる職
数亀甲の素ひむ駄奥屋
子飼へ衣裳洗ゑ垂屋

百八 こんぶと
豆腐と浅草海苔を丁児
延紙で包んで来る家賀
祖父のよい婆ゞ屋
年寄の激絨を染る仲右
百九 油肝八郎
知しる吳男正てお母
雀の巣ろのりや婆
十月キの汐を掬る丈
を枯茶絨を本陣賞

百十 りんぐ勝チ
奚元りへ安を学ん接ア
毛剃の日切り学ん菓屋
大病へ病気学ん藪医
参詣へよる言士の汁
百一 ゆるアんと
市駅借り法ん儒ん書原
お弁当初ぐ初日幕
益細法ん絶古丈
たのり会て碓ん貨屋

二夕駅の行る骨こかさ
手原ぐ蛍ゆる衣皮

百八三　指さ紀さぐ
姉よ駅覚よ雑乃盃
傳子の破換注く斎屋
見乃上ゆる出入の掛ア
子よ芸仕必未社祢宜
自主的こゆる傘屋
分上仮様よ振ゆ糸や
お針が初ゆる不の雪

百八三　夕ア切ら
新見ゆ猫よ鶯の駄
芸西へ踏動多よ且那
何西ぐ減の下ぬ廏

百八四　服を見ぐ
姉ぐ仕ふせく楊弓屋
鶯恨さ人傑お山
ゆるむ芸仕当ゆ
会説よ強白さ芸ゆ
教えぐゆ京

百五 女子にて
草鞋をはき被歩チ
爰足の下なる新屋
仕立て居る者も見る脇頁
涼み掛て出を業居

百六 足るもの
鮑ぐ熟の見えぬ罪
刎と武百の唱る毛剃
出ぐ〜叔へ詩く奉況
笑と恵れく服利武士

百七 足りしかい
毒ぐ幸乳ぐる者白鍵
和年雨こしやなんお年母
芸人へ云る者もひ
出門の妙と初る先る
ちり坊あせるいろは下女

百八 屁こそだしよ
寺を海の深へ戻る費る
十月よ産ム坊屋嘆
妻理の盃うけ る舞

茶卧まぬ呉様をよ
女人堂就へる女ナ形
奴コぐ通る麦の畦
菜漬味ってる段日熟る
義を鞠俺が笑口く梨る
ふすま生き金奥うる偽母

百八九 ちがまつく
ちく薄濃が知る事
老家よ法ふ増レ莖菜
拗ケと這入るぬキ櫨尾

大嫁入りる辻噴
百九 河きのもうる
壊筋家口ふも車
陸人ぐ丸まる家ちく
巻扇と法ふ因示屋
去んぐ柳強を多ふ毒
揚ケの日よ仕義ふ内の用

百一 去ちんく仕義イ
婚祝の急ナぬ寿ふ知耳
ケ郭バ森ふ人変ふる

負ケヘ来ル拵う老剃
拵子の喰へ輝か酒屋
和十日景気どる生洲

(夏二) 辛亥やノ
切去か浮ゐる生き高
伯又ハ輝かる縁人
丑形笑顔さん下向の高
蕣深蓋を去ナ志る高
旅沙送ッて来る仲居
豆腐打つる矢漱の嫁

ツイ濃う素る蕣子
仲居ゞ読ぶ衣皮の状
坊ン歩切志中世居

(夏三) 屁妙ゆう
ゑもあ〻ん焼梨屋
下鈴の悔い女ナ医者
休憩とすも生ふ僧
文墓掃漆ゑ新奴

(夏四) 辛抱せん
京の町連る拍叫礼

大心中見せくまる二日
淡雪隠偽る猿回し
才ろへ家ソ出買
百九五 志ほしし心
門松を探る加ク産業
上菓るの河る羅の社
ちそ月おそめ思るる
百九六 正月ぞ
賀人へ千ぐん舟玉屋
夢儀くみる本陣賀

長比入掛法士仲士
草菜を近信者の書
科の礼法自家原女
枝の豊まる麺ぶき
百九七 おぐ
正月へ元のる子鍬
毒宅素へ来さ蒜法
る具やの端るか和気白
才ろ揺の遊爰医去
樹ぎり無ゆ黒焼屋

(百八) 高〻い〻

魚屋ぞ噛ム白ゝ拭

二月の屏風呼く伯父

華礼の百士ぞめく衣

小丁児の小ゝ糸ゝる毛刺

変人の子養る 参り家

(百九) ユラちゃぶ

ゆ〻〻又呼ど二十壱り座

ゆさゆゆ減る壱次の服

今年就走ゝ長い歩

(百十) 切ゝ子ゝ

角力を重なり笑と変

丁児ぶ扨ゝ流ゝ木勝

挽茶の偽接吹く丁推

(百十一) 重ねゝいく

屏後ケの勝をぬく壱次

夢の子ゝ仏ゝ変り毎

四角ゝ仕立ゝ変る日傘

油煙るの眼おり床

屋人の子解ー提灯屋

三百二 ユラ呵ら迚
城巻てみる鉄ちんが
ゑゑ神妻弱ゑ遠世
ゑ仰きまがる男毒
下向の毒く赤さ染屋
三百三 ゑゝかろぐ
海の通イの呉る毛剃
ゑゝさ世帯と見毒さ俗文
ゑへいろはあらうゝる士
出ゝさ汚物の回りる土

出つ屋戻うゑ迚ゝさ交
仇ぬ和ゑ仇を赤く丑那
ゆゝ灯ゑ蘇ぬゑゝゑの嘆
三百四 ユラ落ト
ゑ代と強ゝさ表方
物の奚蓋もゑゝさ掛广
角力坊賀で去ぬ為主在
迚素蓋子乃蟹の糾
白汚ゆゝうと呑鯉方
羨蓋ゑ丑水呉ぬ蓋ゑ

三五 初つ出うし
禾家で糸とりある糸
出うり小買とし〳〵と家子
ふ勇〳〵鑿と拵り佛河
泥舟〳〵俺る拵りを

三六 初つとうと
外母の去諫ふ〳〵毒
仕世の小ふる拵る業や
矢嵩の屑でふ〳〵系淺
彼岸の入る医者ふ有や

婦の嫁入る浄るり座
拵子附人ぐる蔓子

三七 引てる〳〵
素で呑ム鮑注く乗既
月のうめ〳〵ふ婆恵嫁
上町ふ有る井戸碧日産
仇茅こまた別業古り

三八 むく人めふ
泥舟の年とさん仲右
繃り紆ッ上大工

脇の所に掛け去る光明
抹梁に文字なる字の盃
法華経に経の字に系漢
端に形庭へ変る宮殿
出庭の者へ書る記表

二百九 云やうに
乗仏に写す玉の瓔珞
新しき〜へる抹額帳
嘆る毛刺刺人
おぐりの出しまく姫

二百十 モウ去ぬる
第十ヲ示しる士仲士
二階〜世よく弟戒
云釈の酒屋喚ム毛刺
儀所の四ツ世よく丁児
ケよう〜ル系ル系喚ム士仏

二百十一 毛おっと初く
東風偽ぐいぢる出合紙
羊相絡りへ繋る細字
聟の気仕四〜東ル書老

三百二 ものおさめ

物よ注文のいる上産

売藥で戻る丹書

諸江戸武家医師

ちりけへカム抱人の子

母へ僕る服二ワカ

三百三 解写ゑ

千おや去ぬ北書武士

為ゑ子と戻る大書限

荷ゐいとりる祝仁る士

三百四 おの又ゑ

表ゑ子ぶ注イゑ表ぬ者江

為メ根の消へぬ形峰ヒ屋

舟藤藝子名ゑ数甲屋

組立の義ゑ初為る士

砂瓜の皮ぶ無ゑる羅

る士ぶ汚ゑ文ゑ根

三百五 ゑ人へ合

まの砂指チへチャル仲士

冥の婿の冥笑ゑ出

沙汰仮者ゲ吟く目安
明ケさ茶チャル新話戻り
ちょんゲ迄下咒多ふ輪巻
扶おたんとるハル菓茶屋

（言葉）おハナぐらく
ふ抜鯛買ふ毒ウ薄り
一ナ尺あへ麦る日がら
拾への出来さ多足所
丈てうう譲う製の出来
振ってさおあよりく藝る

宿者もそ迄る汁ぐう
弥ぐハあ抜表ウ髪
（言葉）もよ能うう
寄る泊連へ膳トロを毋
みぐうの芝へ消を自主
戸柳の流よいくさう
走うへ拾てさ奏ぼ
拾ゆくの快よ伯又の俊
毒へ眼ちぐ返ゲ良習ふ
火炬へ喫を呼ぶ居職

(三十八) 世話やき

大月千かチャル賛の礼

系碗切 長へる法師の母

鞠きくめる みちん居

陸子の脊筋吹く毛剃

柳元蔵 参る 傳者

(三十九) せげまし

鞠 ま又へ雲ふ居地

離へ 選ば出しさ又

新きう 伝以礼婆

破舟材傳者ぐ拾ふ 筆

縁 第 笑よ 系る 言士

(三十九) せりく来ぐ

坂縁を 羅 参ふ 毒

海老屋ふ鎌を借る 鉗切

毒ふ 機嬉る 蛍 野

日光のおし 押へら道

賛屋連 注く系 系

(三十) 鞠くと ぐ

ぐり世話甲賛 参ふ 男

教入り仲居ゞ呑メる酒
義ゝ立テ通る加こ者
お年の日ゝる者共下女

(三五三) 年ゝ仕ゝ
表へ母ゞ場を蒲団
ゞ母ゝ教と義ム難義

(三五四) 脊ゝくべさ
立テ会仮場ゝく警官
ゝよ息枝を切る伸士
机系気ゝ帰り易

絞ゝ仕義ゝ
大工の年を住む家
樋ゞ抵ケる古板の沙

(三五五) ゝしゝゆるめ
履ものさゞ蒔表紙
買ゞ仕ゝけるお系人取
ゝ右ゝ立ツ棹隠居
表現も少く二の踏り
入物へ気と長く鞦乃師
年入り髪と結ゝ表沢

三五五 誘ひ給へ
達士へ這入る二度目の礼
一ツ家中注ぐんおかこ接家
辻ゐ回りて来る乞食
記念も扶持を貰ふ者
三五六 とげあるよ
扶代扶ふ婆あケ
茎唄ひ次ぐ者の親母
菜種の高値や
唄屋が扶ふ絵い芸者

三五七 助人がる
加減扶ふ辻田楽
七夕のちづむ廓ちや
乗り乗ふる音の状
月産が粉産が奴や仕事
孫へ油断のたらぬ母
三五八 京へ揚く
三味線弟も指ツ息る
いろはやぐ呑む
出月々孫

涯百講馬宥迭

冠附磨立琥 近刺 一冊

日逸者

折句松竹梅 近刺 一冊

広風道場并六海

流行百家句集 発粹 四冊

絃曲 舞代〳〵へ 小本 一冊

此書ハ高砂尉の舞の写意を
あらはし集め示すゝ後を入れ
拾遺之序序の奥之仰ふ

文化九申年

大坂書林 京屋右兵衛

志保屋平助

女中見たまひて益ゆる書目録

相生百人女筆文 全一冊

錦花百人子代書 全一冊

女教百人操種 全一冊

操百人色紙箱 全一冊

女万葉品定 全一冊

女要小倉文庫の巻 全一冊

操文金玉文庫 全一冊

同 女書摺 全一冊

女教文海智恵袋 女用文庫の巻 全一冊

教訓 女蒙求教訓 全一冊

弦曲 **樺桜當** 南世くやまとさくぎおをうつむ 初編々四編上出来

同 大成 むらくしのこゑうこの をぶりのをぶきおまくまくと大ぶの乃半く 南世ぶりのこゑ うこ舞の地おまくあり

弦曲 唱音 **續樺桜當** 南世ぶりのこゑ うこ舞の地おまくあり

同 二編 三編 四編 五編 近刻

琴曲 唱音 **若艸山** 全一冊

同文化增補琴の艸心 全一冊

琴曲 唱音 **同文化增補琴の乃珍** 全一冊

同文化新增琴のすき 全一冊

文化十四丁丑年 正月 大坂心斎橋筋 久宝寺町

浪花書林 高橋平助梓

謡稽傳抄 全

文謡い本朝書藝の第一ナリ 口傳秘書

謡ハ家ニ稽シテ 秘言と毛赤ゆて自稽

口傳の他ニ稽ヒ 無く去花其外流義

佛ニ示酒宴の席 但ハ無ク 依て別ハ

四中 同合素白の 習ひ拍子節の沢山の

つひせう 蘭曲乃折せう 諸々嗜ミ

本芸成記 初心稽古乃 伝ふ

謡字引 内外二日三十番

唱曲雜録 中本 一冊

指南 巻 ひろゆり 組の指まとこ くく ふ ふり

謡手引草 謡ひ この人此方とれ 最 ひ伝 ふ ふ べき 方 ふ

諸國石佐雲根志　新山田　春門小墨法　全六冊

同　板篇　石は　全六冊

同　三篇　石は　全六冊

此書い諸國こ名石ゑ石郷人の玉佩名品を
拾い集め諸家流花の奇観及び小築先生
年来採集る諸名石数品集め墨流
且先年小築先生諸國紀行の折おく
妙く不思議の奇くし其産出所諸石
家の秘流と奉て裏石部産物奇
紀の仮　大家い代書をこんに出ぶ
諸國紀行脚の名地ーて名産名石名物今の
不思議を知るの去方りと奇の西産地花
況つとくる去よりも面白流茶菓より今
三篇ゑ玉脇板紀行日く流紀行海内紀行る

神易選　小本　一冊

此書い日本の法ーく天児屋命天孫
ゑ命ニ神のくらせ給人石本ゑ
乃ゑの名恵編法性不ゑ所伝遠
紀人支人猿ゑ矢物病人賢ゑ求る方編
一生れ道語百代書ゑんそ心を信ーて
石ゑ乃ゑ名恵ゑんるゑ其業をゑんか
し知石乃ゑと海い弘ゑ

大影漕象地月ゑき

尚世琴ノ三味線ゑ調ゑる者の長ゑ
ゑ者ゑ者ゑ者ゑ者ゑ者ゑ者ゑ者ゑ者ゑ
ゑ者ゑ者ゑ者ゑ者ゑ者ゑ者ゑ者ゑ者ゑ
ゑ者ゑ者ゑ者ゑ者ゑ者ゑ者ゑ者ゑ者ゑ
ゑ者ゑ者ゑ者ゑ者ゑ者ゑ者ゑ者ゑ者ゑ
ゑ者ゑ者ゑ者ゑ者ゑ者ゑ者ゑ者ゑ者ゑ
ゑ者ゑ者ゑ者ゑ者ゑ者ゑ者ゑ者ゑ者ゑ
ゑ者ゑ者ゑ者ゑ者ゑ者ゑ者ゑ者ゑ者ゑ

濃り多く諸人色こまやかなる
代書紙表もノく極ぶ〜て洞白濃り
てこそ合のよかるつひとぶ〜こ藏うん

算学実伝法　全

算学はうん法数は五つ人くも其位とする
の法明らかに決をこゝろいまゝ用こと安八算うて二ラ
又朝時は二一天地又ふつて人と地はんん面
とかんしが又世用ふ物色ふころでん用れ比し
てもし又百用と初る〜又就は一世用と二百と二百と二ると
ものは二ると朝時は人をうと又ふ人ふう其ふ〜い
ようりかしに色と吸自に云ふ〜しろんとあ又一
二三又はいろはの合年とを色と二ると色と二ると
いう年りのひりひときまう物猶う拙っても
其位何ろ〜郭庵に初ろ〜書ちう

茶道早合点

師匠不入立指南　全二冊

茶湯をたゝざる人代年と又人が茶湯を
師匠なくして多代指て数ろ年に茶
繪図を入其用色ろ道具の名こゝろその
如和名悪害方亭ろ主方の奥儀を
悪〜記〜物学の作方うても早く
合点の行ように茶道のうりを集集む

和漢袖玉年代記

全

宇朝の作代者士三皇又宇ようう今代ふ
ふ日本國中作社佛閣の縁起公卿諸侯
諸侯開山智者者士の年譜和武道の
治世経宮を藏と其が年〜所〜不思議
ろりしさ集む来歴と年〜壁を繕ろ
ろ〜考ふ嶽中〜て人新の年譜とも

獨算盤　全

[illegible]

呂物原始　世事談　全五冊

[illegible]

大坂書林　心斎橋南久宝寺町　高橋平助

書高節用　嚢寶早字引　全

世間よ節用集抜きうくさ器財人倫若よ言語ゐと　かうなれ[illegible]門部の[illegible]紙抜を[illegible]二十抜余[illegible]を探ろ甚遠〳〵急用の間合と山節用ハ日用文抜文[illegible]門部ゑ燒ゑ[illegible]ハ時うゑ乃畫そ引べ〳〵たとへば体の字を見[illegible]ヤスム合して六畫ゑある言語門や部

(六)畫ゑりゑ鰐の字と引　ヲラ六畫ゑ[illegible]飛門た部　(五)畫ゑりゑ[illegible]ゆ傾ゑ引べ　紙抜を繰ゑ[illegible]字節[illegible]に出ゑて臣目字と繰ゑとゑ[illegible]し、

新増用文の筆道大全　全

此書ハ新撰かな用文章ハ [illegible] 日ごと入用
の文章 [illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible] 萬對名書法 士農工商 書画詩歌 [illegible]
[illegible] 古今名筆
禁中御門跡 [illegible]
[illegible] 萬種 [illegible]
[illegible] 諸國入 [illegible]
[illegible]
[illegible] 大全の書なり

笠附青[illegible]	天明年中 秀吟大寄
笠附若木賦	寛政年中 秀吟大寄
笠附新木綫	寛政年中 秀吟大寄
同 後編	寛政之末 秀吟大寄
笠附小紫垣	享和文化之間 秀吟大寄
冠附虫目鏡	文化年中大寄 笠附傳授入
笠附三國力士嫋	文政二新版 評者点取

文政二己卯年七月

浪花書林　大阪心斎橋南久宝寺町　高橋平助梓